

心を結ぶ ボールパス



学会関係者との交流会で試合を楽しむオーロヴェッタ鶴岡のメンバーら
=10日、鶴岡市・県立こころの医療センター

山形、鶴岡 精神障害者フットサルチーム活動

統合失調症など精神疾患がある人たちのフットサル「ソーシャルフットボール」に、鶴岡市と山形市のチームが取り組んでいる。スポーツを通じて回復を促し、活動は医療関係者のボランティアが支えている。競技をきっかけに「気持ち前向きになった」と選手は話す。仲間と一緒にボールを追い掛け、社会に踏み出そうとしている。

気持ち前向き「ゴールは「自立」

「みんなうまい」「かなわなないな」。対戦した医療関係者が声を上げる。鶴岡市の県立こころの医療センターで10日に行われた日本スポーツ精神医学会のフットサル交流会。学会参加者らによる5チームと競い、センター利用者でつくる「オーロヴェッタ鶴岡」が準優勝に輝いた。

チームは、同センターの前身である県立鶴岡病院で2013年5月に発足した。所属選手が日本代表に選抜されるなど、全レベルのチームに成長している。

「自分の起伏が減り、日常が明るくなった」。初期からのメンバーの多くは病院関係の有志が運営し、人手の確保は困難だ。そんな中、山形市のチーム「バリエンテ山形」は一般のボランティアを巻き込んで活動を広げようとしている。

公徳会若宮病院（同市）のアイケアプログラムとして、15年9月にスタートした。選手は10〜40代の10人。市総合福祉セン

で心がつながると魅力を説く。
人手確保が課題

は「仲間と協力し、スポーツを楽しむ中で症状の安定が見られる」と説明する。同病院ではチーム発足後の5年間でメンバーの約半数が就労につながったという。昨年2月には大阪で世界初の国際大会が開かれるなど活動が広がっている。

メモ NPO法人日本ソーシャルフットボール協会（東京都）によると、精神障害者のフットサルチームは国内約130、競技人口は1500人を超える。大阪府の新阿武山病院で2006年に始まった。同協会の岡村武彦理事長（新阿武山病院長）

「打ち込むことがある。それが支えになる」とコーチで精神保健福祉士の古川和外さん（38）は話す。対話が苦手な患者でもフットサルならパスやシュートで気持ちが通う。「ボール一つに自信をのぞかせた」。

高校中退だった●さんは今通信制で勉強している。「しっかり卒業します」。小さな笑みに自信をのぞかせた。

「理解を育む場なのかもしれない」とコーチで精神保健福祉士の白田幸輝さん（31）は考えている。精神障害者がフットサルなんてできないと社会は偏見を抱いているかもしれないが「一緒にプレーしたらそんな壁はすぐ越えられる」。

競技を通じて選手は自主性を育み、就労を意識した人もいます。「ここがゴールではない。社会に出て続けてほしい」と白田さんは思い描く。そのために、交流の輪を広げていきたいと考えている。

ンバーの●さんは自身の変化をはっきりと感じている。交流会ではサッカー経験者などの一般参加も募っている。交流の仕方は対戦や、技術的な指導だけではない。「ミスを批判する前にカバリーしよう」「焦らず一呼吸置いて」。参加者は先輩、友人として選手に声を掛ける。